

---

# 桃組 + (プラス)戦記妄想外伝

ソダグァ

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

桃組＋（プラス）戦記妄想外伝

### 【Nコード】

N28630

### 【作者名】

ゾダグア

### 【あらすじ】

『生まれ変わり』と、呼ばれる者たちをご存じだろうか。

物語のモデルや歴史上の著名な人物が生まれ変わった者や、血を引いた者たちのことである。彼らは前世で用いた道具を模して造られた『覚醒具』と呼ばれる道具を手にすることで、かつての力に近い物を取り戻すことが可能となる。

愛譚学園にはこの『生まれ変わり』と呼ばれる人々が多数いる。

この物語では彼らの一部に起きた出来事を追って行こうと思う。

## デイルムツド編（前）（前書き）

『桃組＋戦記』の二次創作です。とは言っても、原作での登場人物はとあるキャラを除いてほとんど出ない、シエアワールドもどき。

『Fate/zero』タグは用語の読み方を借りたので一応書いてあるだけと言った感じです。

最後に、主人公を中学生に設定しているので、厨臭く、さらに主人公の完全一人称語りにしてあります。まあ、厨臭いのは今までの私の作品全般そうですね。

それでも構わないと思われたなら、貴方の時間をこの作品に少しだけ下さい。

## ディルムツド編（前）

あらずじ

『生まれ変わり』と、呼ばれる者たちをご存じだろうか。

物語のモデルや歴史上の著名な人物が生まれ変わった者や、血を引いた者たちのことである。彼らは前世で用いた道具を模して造られた『覚醒具』と呼ばれる道具を手にする事で、かつての力に近い物を取り戻すことが可能となる。

愛譚学園にはこの『生まれ変わり』と呼ばれる人々が多数いる。この物語では彼らの一部に起きた出来事をこれから追って行こうと思う。

まえがき

『桃組＋戦記』の二次創作です。とは言っても、原作での登場人物はとあるキャラを除いてほとんど出ない、シェアワールドもどき。

『Fate/zero』タグは用語の読み方を借りたので一応書いてあるだけと言った感じです。

最後に、主人公を中学生に設定しているので、厨臭く、さらに主人公の完全一人称語りにしてあります。まあ、厨臭いのは今までの私の作品全般そうですね。

それでも構わないと思われたなら、貴方の時間をこの作品に少しだけ下さい。

### 私立愛譚学園。

愛譚市の中央の高台に位置する、幼稚園から大学院までの学校設備の複合体である。

選り抜かれた生徒・教職員を含んだ学校関係者は1万5千人を越し、彼らのための宿舎や娯楽設備を周囲に完備した敷地内は、「学園都市」と言っても良いだろう。

教育プログラムも各生徒の特性や希望に合わせた多数の学科、優秀な生徒・教員に贈られる報償、校内の商業施設での労働体験など、他の教育機関と一線を画している。

『愛譚学園紹介パンフレット20XX年度版』より抜粋

『生まれ変わり』と、呼ばれる者たちをご存じだろうか。

物語のモデルや歴史上の著名な人物が生まれ変わった者や、血を引いた者たちのことである。彼らは前世で用いた道具を模して造られた『覚醒具』と呼ばれる道具を手にすることで、かつての力に近い物を取り戻すことが可能となる。

愛譚学園にはこの『生まれ変わり』と呼ばれる人々が多数いる。

その内の一人に起きた出来事をこれから追って行こうと思う。

桃組<sup>プラス</sup>＋戦記妄想外伝 「デイルムツド編（前）」

学校自体の形態が変わっている愛譚学園において、変人・奇人は列挙しようと思ってもしきれない程いる。例えば高等部芸能学科の暮内紅<sup>くれうちこう</sup>などは有名モデルとして学園外でも名前が知られているし、毎日夕方になると高等部の何人かが踊る童謡の『鬼のパンツ』……いや、最近『鬼のスーツ』になったのだった。とにかく、それをする彼らは学内で時計代わりとして浸透している。

自分、中等部3年のダイアー・ベンブルベンには彼らのような濃い個性は無い。しかし、国際科に所属しない外国人と言う事で、そ

こそ顔は知られている。

「ホームルーム始めっぞ」

初等部3年からの6年間を過ごしてきたこの学園において、自分は己のルーツについて深く考えさせられた

「……って、あゝっ！」

書いていた途中の自己推薦用紙が突如上から奪われる。慌てて見上げると、自分の所属する3・B担任の抜田鉄<sup>ぬきたくろがね</sup>が、奪った紙を持ってそこにいた。

「ホームルーム中に何をやっているかと思えば……。ダイアー、こう言うものは帰ってから書け。

コラ那須、オマエもだ！」

2つ前に居た、級友の那須もオレと同様に用紙を奪われた。3年生の2学期ともなると、進路について考えていなければ行けない。いくつかある選択肢の中で自分は、この愛譚学園の高等部に進学することになっていた。昼放課に職員室に呼び出されて貰った用紙に自己推薦文を書いて提出すれば、自動的に面接試験の受験資格を得る。忘れないうちに書いてしまおうと思ったのだが、さすがにホームルーム中に書くべきでは無かった。

「まったく。これはHRが終わるまで預かっておくぞ。そもそも今の話はお前にも大切なんだから、しっかり聞いておけ」

抜田は教卓に戻ってしまった。

ああ……これは職員室でのお説教フラグだ。

とりあえず説教の時間を短くできるよう、HRの間くらいは態度をきちんとしてくれた。

「いよいよ明日、高等部の体験授業だ。希望者は指定された持ち物を忘れるなよ。忘れた者は外部への進学者と一緒に普通の授業だ。」

では、解散。先ほど用紙を没収されたバカ二人は廊下に出る。

ガタガタと音を立て、クラスメイト達が席を立つて行く。

オレと那須は主の居なくなった席を挟んで顔を見合せると溜息を吐く。

「行くか」

「そうだな」

そして、廊下に出た。

×××××××

抜田からの説教を右耳から左耳に聞き流すこと10分弱。用紙を返して貰い、解放されたオレと那須は共に野外活動部に参加していた。

野外活動部とはキャンプ部に野鳥観察部や野戦料理研究会など、とにかく屋外で活動する文科系クラブを、人数不足と言う理由で統合した部だ。

「お、雉<sup>きし</sup>が飛んでる」

と、テントを立てるための杭を打っていたオレは後ろを振り向いた。そこでは那須<sup>なす</sup>が双眼鏡を首から下げていながら、裸眼で遠くを見ている。

アイツは那須<sup>なす</sup>与一の生まれ変わりらしく、弓道部顔負けの弓の腕に加えて視力がとてつもなく高い。授業中は遠視矯正眼鏡がないと教科書が読めないくらいだ。

【『那須与一』

鎌倉初期の武士で、船の上に乗っていた敵が広げた扇に矢を命中させた程の射手。

狙い打つぜ！（大河内民明丸著『世界のスナイパー百選』1974年民明書房刊より）】

「やった、どこ？ 久しぶりにキジ鍋喰いたいんだ」

オレは杭を打つ手を止め、那須の下に歩いて行く。

日本に来て初めてキジ肉を食べたが、あれはなかなか美味い。学内に生息しているなら、生息域を確認して学内食材マップに加えなければ。

嬉しくて思わず覚醒具の『必滅<sup>ゲイ・ボウ</sup>の黄薔薇』を展開してしまったオレに、那須は呆れた口調で返してきた。

「はあ？ こんな所でキジが取れるはずないじゃん。ボクが言ったのは獣基の『雉』」

一気にやる気が失せた。

オレは黄色い短い槍　ゲイ・ボウを収納状態にし、常日頃から持ち歩いているリコーダーケースにしまった。



。 那須が見つけたと言ったのは、高等部に居る桃太郎の獣基の『雉』  
確か……

「雉乃木センパイだったっけ」

那須から奪い取った双眼鏡で見ると先には、雉をモチーフにした仮面を付けた少女の姿。仮面を取った顔を見たことはないが、結構美人らしい。主である桃太郎の言動に対して、しょっちゅう鼻血を噴き出しているせいで台無しらしいけど……。

まあ、良い。とにかく那須が野鳥観察をしながら行っているのは……。

「くそう。相変わらず鉄壁のガードだ。パンツどころか、ふとももさえ拝めないなんて……」

那須は本気で悔しがっている。

こいつはバードウォッチングにかこつけて、飛行型の獣基の女生徒のスカートの中身を見ることが趣味なのだ。そのために弓道部からのラブコールを蹴り続けている。

せっかくの弓の技術がもったいない。

まあ、一緒になって見ているオレもオレだけど。

「ごきげんよう」

と、うしろから女生徒の声。

奈須と一緒に振り向く。

「げ!？」

那須が奇声を挙げるが、原因は何だろう。オレにはさっぱりわか

らない。なにせ

「馬？」

奇蹄目ウマ科の生き物の顔がオレの視界を埋め尽くしていたからだ。

「ダイアー、双眼鏡を下ろせ」

おお、双眼鏡覗いていたことをすっかり忘れていたぜ。

那須のアドバイスに従って双眼鏡を下ろすと、やっぱり馬。

「……じゃない。警備委員長！？」

そこには馬に乗った警備委員会の長が居た。

「人を見て“げ！？”とはなんですか？ 『げ！？』とは。それではまるで悪いことをしていたみたいですよ」

警備委員長は流麗な顔立ちに呆れの色を交え、オレたちを見下ろしている。

ちなみに警備委員会とは愛譚学園の平和を守る委員会のことだ。彼らは学園内に居る『生まれ変わり』のことを知らない一般生徒を守ることが彼女ら第一の使命で、悪いことをしている生まれ変わりを取り締まったりもしている。風紀委員と似たようなものだが、一応棲み分けがあるらしい。

それとはかくとして、オレ達のような不屈き者が彼女らと出くわしてしまっただろうすればいいのか。そんなの簡単だ。  
テイク・イット・イージー

「「逃げる！！」」

オレと那須は正反対の方向に駆けだす。

三十六計逃げるにしかず。昔の人は良い事を言ったもんだ。

「あ、お待ちなさい！ やっぱりまた覗きをしていたのですね！？」

後から警備委員長の声が聞こえるが、無視して逃げる。

テント具を置いてけぼりにしてしまうことになったが、あの委員長さんのことだ。きつと手をつけたりなんてしないハズだ。後で回収できる。

「「待て！」」

と、前方に2つの影。

見覚えのある警備委員だ。

「ダイアー・ベンブルベン。今日こそはとっ捕まえて、お説教だ！」  
「そうそう。そして我ら警備委員の仲間として……」

警備委員会の加入資格として、『動物組』以外で戦う力がある生まれ変わりと言うものがある。オレも那須も条件は満たしているから、更生させて戦力にしようとヤツラはたくらんでいると言う訳だ。

「あいにくと、オレは官憲の手下<sup>イス</sup>となる気はない！」

オレは持前の逃げ脚を使い、二人の間をすり抜ける。

「逃がすか！ この夏休みに習得した技を受けよ。」

チェーン・スマッシュヤー  
鎖分銅！」

片方、小柄な男子が錘を付けた鎖をこちらに投げってくる。いかなる妙技か、それは避けたオレの体に蛇の様に絡み付こうとしてきた。だが、そう簡単に捕まる訳にはいかない。

フライング・サーモン  
「鮭跳び！」

オレは、生まれ故郷の川に帰って来た鮭が、遡上の途中に滝を飛んで越える時のような跳躍をもって回避。

「夏の間に新たな技を習得したのがお前だけと思うなよ。これぞ、<sup>スキル</sup>フィオナ騎士団員の加盟条件の一つ『鮭跳び』だ！」

オレは前世でフィン・マックール貴下のフィオナ騎士団に所属していた。

騎士団の入団資格の一つには「自分の額の高さの枝を跳び越える」と言う項目がある。

前世にできたことだからオレもできる。そう考えて夏休み中実家でずっと特訓した甲斐があったというものだ。

「オシーリペンペン」

オレは跳び乗った街路樹の上で警備委員に尻を向けると、そこを軽く叩いてそう言った。

恥ずかしいが、これも逃走する際の流儀。キチンとやらないと「バチがあたる」らしい。太鼓がない場所で「バチ」が当たるとはどう言うことかは分からないが、<sup>ゲッシュ</sup>聖誓みたいなものだと思って我慢してやっている。日本文化は奥深い。

「くっ…馬鹿にして！」

鎖分銅を回収している相方を放って、もう一人の警備員がスカートを翻してホルスターに手をかける。パンツの色や柄を確認するチャンスだが、何度もやりあつてゐるからコイツがブルマを下に履いていることは先刻承知だ。無視。

「はっ！」

放たれる前に手近な道路灯に跳び移る。だがオレの動きは読まれていたのだらう。すぐに追撃が放たれる。

「疾走<sup>はし</sup>れ、ゲイ・ボウ！」

覚醒具を展開。短槍を風車の用に回転させることで、『くない』とか言う投げナイフは全て叩き落とされる。

なにげにコイツも腕を上げてゐるな。

感心しながらも、オレは無意識の内に次の足場を探し、決定。そのまま木々や街路灯を足場に跳び続け、その場から離れた。

×××××××

「よう、無事だったみたいだな……」

寮での夕食。オレは友達と食卓についていたのだが、那須が後から声をかけてきた。

「那須、お前……」

振り返ったオレは、那須の姿に思わず声を上げてしまった。  
ボロボロになった服。

傷だらけの肌。そして……

「なんだ、その……看板」

首から下げた看板に、

『ぼくはわるいこです』

と、可愛い文字で書かれているではないか。

「途中で桃太郎一行に出会っちゃったんだ。雉乃木センパイの下履きを覗こうとしていたことを委員長さんが言っちゃって、一獣基2体（イヌ&サル）<sup>プラス</sup> + 桃太郎による制裁を受けちゃったぜ……」

自業自得だとは思いながらも、同情心が上回ってしまう。オレも、一歩間違えればこうなっていたのだ。

「那須君。ソレ、外しちゃったら？」

一緒に食事をしていた一人、鳥毛虫<sup>うたむし</sup>が言う。彼女は女子生徒にしては結構気軽に友達付き合いができるヤツだ。前世が堤中納言物語の『虫愛づる姫君』なだけある。

これでもう少し女の子らしく服装とかに気を使っていればなあ……。

【『虫愛づる姫君』

良いとこの娘のクセに、子供と混じって虫を見るのが好きな姫様の話。でも、物事は本質が大事なのは確かだよね。（イリヤ・ムシスキー著『ファールブルの仲間たち』その驚異の生態』2004年

【民明書房刊より】

「外したことがバレたら、明日から一週間『鬼のパンツ』……」

鬼のパンツとは愛譚の名物の一つだ。

高等部のとある先輩方　まあ、桃太郎の獣基たちなんだが。彼らが幼稚園に居た頃から続けている習慣で、童謡の『鬼のパンツ』のメロディに合わせてパレードすると言う物だ。今年からは桃太郎も参加して、パンツからスーツに変わっている。

初めて見た時は正直、獣基に生まれなくて良かったと思った。

少し遅い時間だが、食堂にはまだ人が多い。桃太郎達の知り合いも当然居るだろう。

「まあ、がんばれ」

俺是那須の肩に軽く手を置く。同じく席を立て、鳥毛虫がオレとは反対の肩に手を置いていた。

×××××××

『おっと……すまん、デイルムツド。また零<sup>こぼ</sup>してしまった』

目の前で、また主が手の腕から癒しの水を零す。2回目だ。

半死半生の従僕　デイルムツド<sup>オレ</sup>を前に動揺したのなら、まだ良かった。だが、目の前の男は英雄の誉<sup>ほまれ</sup>も高き、老君フィン・マツクール。そんな事はない。

フィンは踵を返すと再び泉に手を入れ、水を汲んだ。  
しかし、もう間に合わない。

『貴方が……ここまで卑劣とは思わなかった……』

デイルムツド<sup>オレ</sup>が悲しげに呟いた。

結末は知っている。だから、もう何も見たくはない。けれども、瞳を閉じることさえできない。

『俺は、ただ騎士として生きたかっただけなんだ……』

デイルムツド<sup>オレ</sup>は、そう呟いて事切れた。

続く。



## ディルムツド編（中）

【『ディルムツドとグラニアの物語』

主の花嫁候補と一緒に駆け落ちした騎士の、逃亡と裏切りのファンタジー。寝取られ男の恨みは、怖いですわよ。（愛譚学園報道部編『教えて魔女先生！ 2010年版その2』より）】

桃組<sup>プラス</sup>＋戦記妄想外伝 「ディルムツド編（中）」

「  
！」

布団を跳ね上げて起きる。

周りの景色は先ほどまでの森の中ではなく、見なれた寮の部屋。  
だとすればさっきまでののは……

「夢か……」

ほっと胸をなでおろす。

しかし、妙にリアルだった。まるでその場で見てきたみたいなの。

「ふえつくしよい！ うう、寒い……」

寝ている間にかいた汗で寝巻きのシャツは重く、湿っていた。  
時計を見るともうすぐアラームを設定した時間に針が着こうとしている。オレはアラームのスイッチを切ると、ベッドから降りた。

××××××

高等部の体験授業と言う事で、オレはいつもより早く寮を出た。遅刻しないように用心したと言う訳ではない。オレの希望進路先  
家政科従者専攻による指定だ。

普通科に行く予定の那須なんかは、ゆうゆうと寝ている。少しうらやましい。

「でも、朝の空気は気持ちいいな」

誰に言うでもなく、呟く。

グラニアと一緒に逃げていた時の落ち着かない朝が懐かしいくらいだ。あの時は寝ている内に追っ手が来ていないか警戒したものだし、魔法のかかった泉を避けて朝露で渴きを癒したこともあった。

「　　って、なんで自分のことみたいに言ってるんだよ!?!」

自分でツツコミを入れる。

ディルムツドのしてきたことを、自分のしていたことのように感じてしまった。

どうも昨晚の夢のせいか、自分の中のディルムツドの部分が無意識に表に出ている気がする。

「やべ、遅れちまう」

いつもならもつと落ち込むのだが、今日はそうもいかない。  
オレは少し歩を早めた。

××××××

「で、一体何やらかしたんだお前」

ところ変わって生徒指導室。担任の抜田を含めた数人の教師相手に、オレはここで取り調べを受けていた。

事の次第はこうだ。体験先では先輩方と、オレを含む中等部生徒の1対1の組を作ることになった。家政科に含まれるだけあって圧倒的に女子の割合が多い。オレも女性の先輩と組むことになるはずだったのだが、誰がオレと組むかを決めるために争いが起こってしまったのだ。従者専攻の生徒は主に仕えるために慎みを持つように指導を受けている。それでも暴走してしまったので、オレが怪しいと言う事になったのだ。

しかし、“やらかした”って、先生……。それじゃまるで何か薬か呪術でも使ったみたいじゃないですか。

「違うのか？」

体育の先生　　猛ヶ丘が聞いてきた。だがオレが反論するより前に、抜田が代わりに答えてくれた。

「コイツに限ってそれはないですよ。女には困ってないみたいです」

室内の気温が下がる。抜田以外の教師、とりわけ女性の教師の視線が冷たい。

もう少し言い方と言う物があるとは思うが、アイツが言った事は正しい。オレは結構モテる部類に入っている。前世の異名が『輝く貌』<sup>かお</sup>と言うだけあって、顔は良いのだ。

去年のバレンタインデーなんかは那須達に協力してもらってチョコを片付けた位だ。

「まあ、専科の連中の薬や呪術であそこまで強力な術はなさそうだしな……」

先輩方にもみくちやにされていたオレを救出した猛ヶ丘は実感がこもっている。他の先生方も、そんなものがあつたらとづくに連中が使ってるよな。と、納得していた。

専科って言うのは『専門知識習得科』の略で、呪術師や薬師の子孫が一番多いらしい。と言う連中かは知らないが、聞いた話から類推した限りではドルイドに近い。前世で養父がドルイドだったので結構親近感が沸くのだが、評判は良くない。どうしてだ？

まあ、いい。とにかく猛ヶ丘は最初からオレの事を疑ってなかった。って、事でいいんだよな？

「なら『生まれ変わり』の線で当たってみるべきですね。ベンブルベンくん。君の前世は？」

尋ねられたので答えるが、たぶん知っている人は少ないだろう。

「えっと、アイルランドの伝承なんですけど『ディルムッドとグラニア』って、知ってます？」

「と言う事は、貴方はディルムッド・オディナ？」

派手なおばさ……痛て、殴りやがった!?

「おばさんではありません。『魔女先生』とお呼びなさい」

もとい、国際科の魔女先生が訪ねてきた。

しかし、心を読むとは……流石魔女。挽き臼の魔女も『破魔の紅薔薇<sup>ルグ</sup>』がなければ倒せなかったし、やっぱり恐ろしい。

「はい。オレはデイルムツド・オディナの生まれ変わりです」

やっぱりそうだった。とでも言いたげに、魔女先生は軽く自分の頭を押さえていた。

国際科の連中を率いてるだけあって、やっぱり詳しいな。

「デイルムツドとグラニアって、『トリスタンとイゾルデ』とかの元になったって話の?」

これまた知らない先生が聞いてきた。

今まで友達に話しても知ってるヤツいなかったけど、日本にも知ってる人居るんだな。

「ちょっと待って下さい。と、言う事は、原因はこいつの能力のことですか?」

「ええ、100パーセントそうですわ」

抜田の問いに魔女先生は溜息を共に答えた。

オレは嫌な予感がし、目の下を触ってみる。

ほんの小さな膨らみ。ニキビとは違うそれは、黒子<sup>ほくろ</sup>だ……。

「昨日までなかったのに、なんで……」

今朝は寝汗が気持ち悪かったのでシャワーを浴びてから着替えたので、ろくに顔を見てなどいなかった。  
くそ、よりにもよって『愛の黒子』が覚醒するなんて……。

「ダイアー、黒子なんて触ってどうしたんだ？」

抜田が聞いて来る。動揺していたオレの代わりに、魔女先生が答えてくれた。

「その黒子こそが今回の騒動の原因ですわ。とりあえず隠せば問題はありません。本当は本人が訓練して抑えなければなりません、応急処置としてはそれでいいでしょう」

指を軽く鳴らす魔女先生。瞬間、彼女の手には薄い、プラスチックの光沢をもった物体があった。

「これからあなたは、コレを被っていなさい」

黒子を見ないように顔を背けながら魔女先生が渡して来たのは

「『五つ子戦隊似てるんジャー』？」

の、お面だった。

×××××××

結局、解放されて寮に着く頃には、このごろ短くなってきた日はすっかり沈んでしまった後だった。

人気のない扉を開けると、運動系の部活に入っている連中が下駄箱にたむろっている。ソイツらはオレの顔を見るなりぽかんとした顔を見せたが、やがてどっと、笑い始めた。

オレは笑い声を見無視し、自分の靴箱に向かう。だが、肩が掴まれた。

「おいおい、そんな無視すんなって。                    マールブラウン・レッ  
ドくんよお」

ゲラゲラと笑いながら一人が言う。

手を振り払ったが、オレが靴箱を背にするように周りを囲んで来た。すり抜けようとするも、人が多くて出来ない。

「                    !?」

鬱陶しい。そう思って力を込めた腕は、連中の一人を手近な柱に叩きつけていた。

寮が揺れる。

「                    か、は……」

叩きつけられたヤツが出した、空気だか声だか分からない音で連中はざわめきだった。

「                    テメエ!」

激昂した一人が拳を振りかざす。

見るからに素人の物と分かる、ボールを投げる動作に似たフォーム。

遅い。お面で制限された今の視界でも十分に見える。

オレは拳を流すと相手の手首を掴み、背負うような形で投げ、地面に叩きつけた。

「ぐ、ウ……」

倒したヤツの鳩尾のあたりを踵で踏みつけながら、オレは周りを睨み付ける。

連中の背後には騒ぎを聞きつけて来たのか、寮生が集まってこちらを見ていた。だがオレが目を向けると、視線を合わせないように顔を背ける。

オレに突っかって来た連中も、オレに倒された奴らを置いて後ろにじりじりと後退している。だが、踏まれているヤツの苦しむ声を聞いて何人かが意を決してこちらに向かってきた。

「よ、つと……」

手段を選ばなければ大丈夫だが、殺さないように手加減するとなると、ひい、ふう……5人の相手は無理だ。日本に来るまで口々に喧嘩をしたこともなかったクセに、今のオレにはそう判断できた。

踏みつけていた足を下ろし、倒れているヤツの体と床との間につま先を突っ込んだ。そして、足で持ち上げる。

「ぐあっ……！」

シュート。

ボールにされたお友達に吹き飛ばされて3人程がその下敷きにな



る。それでも二人が避けることに成功。

まあ、こんなことで片付くとは最初から思っていないが。

「何の能力だが知らねえが、そのふざけたお面の下のツラあ！ 拝ませて貰うぜ！」

一人が走りながら仮面を付けた。動物の生まれ変わりだ。

流石に素手で生まれ変わりを相手に出来るとは思わない。オレはズボンのベルトに手挟んでいたリコーダーケースに手をかけ……

「そこまでだ！」

……ようとした所で止められてしまった。

オレの腕は警備委員の腕章を付けた生徒に止められている。相手の方を見れば似たような状況だった。ただし、あつちは仮面を付けた奴が暴れるので2人がかりで、ついには床に押さえつけられてしまっていたが。

「詳しく話を聞かせてもらっぞ」

腕を引かれる。

オレは、寮の外へと連れ出された。

×  
×  
×  
×  
×  
×

それからオレは取り調べを受け、学内の某所で勾留された。某所

と言ったが、別に場所を明かしてはならないと言つ守秘義務がある訳ではない。ただ単に、連行された際に目隠しをされたからどこだか分からないだけだ。

「ほら、遅刻するから急げよ」

再び寮の前に運ばれ、目隠しを取ってもらった時には既に多くの生徒が玄関を後にしていた。オレは部屋に駆け戻ると、鞆を引っ掴んで寮を後にする。

×××××××

「しつれいしま〜っす……」

結局、間に合わなかった。  
教室のドアを開けると朝のHR中で、抜田が教壇で話しているところだった。

「おう、ようやく来たか。こっち来い」

言われた通りに近づいて行くと教室中の視線が集まり、恥ずかしいを通り越して痛い。

そんなオレの感想を知ってか知らずか、抜田は他のみんなに説明し始めた。

「顔にお面なんか付けてるが、こいつが誰だか分からないって薄情

者はこのクラスには居ないよな？

そう、ダイアー・ベンプルベンだ。

今日からしばらく、コイツはお面をして生活することになった。女子に素顔を見られると問題が起きるから、くれぐれも冗談で外そうと考えるな。でないと先生の仕事が増えるんだ。わかったな！？」

抜田の声には妙に殺気がこもっていた。顔を見れば、目の下に隈ができている。

クラスメイトも抜田のそんな様子が気になるようで、オレへの視線が減っている。

「それじゃあHR終わるぞ！ ダイアー、事情は聞いているから今回は見逃してやる。次は無いと思え」

そう言っただけで抜田は教室を出た。

入れ代わりに一限の先生が入って来たので、オレは自分の席へと向かった。

続く。

## デイルムツド編（後）

桃組<sup>プラス</sup>＋戦記妄想外伝 「デイルムツド編（後）」

お面を着けて生活するようになり、一週間程経った。

『生まれ変わり』達は理解が早かったし、その他のクラスメイトも何かあると察して、いつもどおりに対応しようとしてくれた。だが、腫れものを触るようなその態度はかえって辛い。

「はぁ……」

オレは授業後に一人、中等部の屋上から運動場を見下ろしていた。につつきお面は外しているので、運動部に所属する生徒が青春に汗している姿がよく見える。いつもなら陸上部の女生徒のブルマから延びる、美しく締まったふともを観察していたのだろうが、今日はそんな気分にはなれない。

「オレ、一生このままなのかな……」

お面を手の上で弄びながら呟く。

何も行動しなかった訳ではなく、今日も制御の訓練を行った。破壊力がある能力なら被害が目に見えて分かるのだが、オレの能力はすぐには分かりにくい。そこで学校から紹介を受けた工業科の先輩の協力を得て、機械による測定を行った。まあ、途中で「私は学会に復讐してやるんだ！」とか言って世界征服の準備始めちゃったから止めに入らなきゃならなかったが……。つつか、成原<sup>なりはらなりゆき</sup>成行の生まれ変わりとかわねえよ！

【『成原成行』

鬼才、変人、バカ。彼を評価する代表的な言葉をいくつか挙げる  
とすれば、こうなるだろう。だが彼の才能は世間に認められること  
は無かった。学会を追放されてもなお研究を続けていた彼は、息子  
の交通事故をきっかけにある物を造り出した。

アンドロイド 人造人間だ。ジャッキー（邪鬼・GUN 著『エターナル・フォース・プリザード永遠破導氷撃』相手は死ぬ』

2009年厨房館刊より）】

とにかく、これが解くことのできる呪いではなく、もはや『能力』  
となってしまうことが分かった。そして、呪いではなくなっ  
たそれは、一生オレの生活について回ることも。

「はあ……」

もう何度吐いたか分からない溜息を吐く。人の出入りが無い癖に  
……いや、だからなのだろう、綺麗なフェンスもたれていると、耳  
障りな金属音。

錆びた蝶番ちょうばんが軋軋む音だ。屋上に至る出入り口が開かれようとしてい  
る。

ぬかった。お面を外しているところを見られないように、わざわざ  
立ち入り禁止区域の借りていたと言うのに。入ってくるのが女子  
生徒と言う可能性を考慮し、外しっぱなしにしていたお面を急いで  
着ける。

「ここは立ち入り禁止区域ですよ。何をしているのです？」

聞こえたのは女子の声。しかも聞き覚えがある。急いで振り向い  
て狭い視界で覗くと、そこには警備委員長が立っていた。

いつもの癖で逃げようとしてしまうが、唯一の通路は委員長が塞い

でいる。飛びおりることも考えたが、今の時間帯では一般の生徒に見られてしまうために無理だ。

……って、逃げる必要ないじゃん。

「ちょっと暴走が収まるのを待ってました。もう収まりました。学校からはちゃんと鍵を借りてますんで、失礼」

正体がばれないように口調はいつもより丁寧に。だが、そそくさと彼女の横を通り抜けようとすると、腕を掴まれてしまった。

「その割には破損個所が見当たりませんか？　あと、そのお面はどうしたんですか、ベンブルベンくん」

「いや、精神に作用するタイプなので……」

……って、なんでこの人、オレだって分かったんだ！？  
問いかけると、こんな答えが返ってきた。

「何度も逃げられた相手ですからね、声くらい覚えますよ」

何と言うか、声に怒りがこもっている。何度も警備委員を振り切ってコケにしたから、相当根に持っただろう。

もしかして、オレ、ヤバい状況……？

『仮面の下、涙を拭え』……じゃなくて、お面の下で冷や汗を流しながらそっと、オレは委員長の手を腕から外そうと試みる。だが、帰って強く握られてしまい、痛い。

「あら、まだ話は終わっていませんよ。それでは詰め所まで一緒に来て下さい」

「はい……」

結局、オレは彼女に連れられて警備委員の詰め所まで行くことになったのだった……。

×××××××

『オラ、とつとと吐けや……』

ブラインドが下ろされ、外の光が全く届かない密室。オレはそこで2人の取調官を相手に取調べを受けていた。

『……………』

黙秘権を行使すると、机を挟んで向かいに座っていた男は立ち上がり、思いきり机を叩いた。

『デメエがやったってのはあらかた分かっているんだ！ そのままダンマリを続けるっていうのなら……』

男の腕が振り上げられる。だが、それがオレに届くことは無かった。

『やめとけ、ヤス。そんなことをしたってコイツは吐かねえよ』  
『しかしおやっさん……』

もう一人の男は腕を離すと、オレの目の前にどんぶりを差し出した。

『喰いな。暖かくてうまいぞ』

蓋が取られると、そこは黄金郷<sup>エルドラド</sup>だった。黄金の様に輝くと卵にキツネ色のカツが閉じられている。その真ん中には緑の三つ葉がささやかながらも、存在感を持って鎮座している。

同時に、オレの手錠が解かれた。差し出された割り箸を奪い取るように受け取ると、急いで割る。そしてオレは貪るようにカツ丼に喰らいついた……などのやり取りはなく、オレは先輩に来客用のソファ勧められた。

「どうぞ」

他に委員は誰もおらず、委員長自らが入れてくれたお茶が出される。

……湯のみなのにダージリンかよ。

「どうも……」

委員長は自分の分の湯のみを応接机に置くと、オレの対面の席に腰を下ろす。

「で、オレを連れて来て一体どうしようってんです？ 取り調べですか？」

窓と言う窓に鉄格子が填め<sup>は</sup>られた詰め所からの逃亡は容易ではない。オレは最初から逃走<sup>ハナ</sup>など考えずに居直ることにした。

委員長さんを倒して扉を蹴破れ<sup>ハナ</sup>って？ そんな酷いことを女の人にできる訳ないじゃないか。

「まあ、まずはそうなりますね。話してくださいますか？」



「お断りします」

すると頭頂部に鋭い痛み。

「話して下さいますね？」

「イヤです」

答えは同じ。

2度も同じ手は喰わないつもりで警戒していたが、今度は下から顎を打ち抜く鋭い衝撃。

「話して下さいますね？」

また断つて、今度こそ攻撃を見切つてやろうと考えたが、むしろ説明した方がいいのではないだろうか。もしかしたら便宜を図ってもらえるかも知れないし、過去の罪も見逃してくれるかも知れない。

「イ……いですよ」

×××××××

「自らの能力のせいで暴走する人を、私は何人も見ています」

オレから一通り聞き出すと、委員長は少し目をつぶって黙考した後、口を開いた。

「彼らは暴走した際の事を全く記憶に残さないこともあれば、すべて覚えていて苦しんでしまうこともあります。」

ですが、総じて言えるのは、力を制御できるようになっていることです」

それから彼女は名前を伏せながらいくつかの実例を語り出した。そのどれも某週刊誌のお約束に則<sup>したが</sup>って『努力・友情・勝利』を体現していた。

たぶん彼女が言いたいのは……

「貴方は頼りになる仲間と共に、努力してその能力を支配下に置くのです！」

と言う事だ。だが、それは難しいんだよね……。

「良い考えだと思えますよ。今お面を外してあなたに黒子を見てもらいましょうか」

オレは冗談のつもりでそう言ってみた。鳥毛虫が申し出てくれたけど断ったネタだ。いくら彼女でも、まさか自分に魅了がかけられて平気な訳があるまい。

「ええ。それではお面を取ってください」

委員長は腰を浮かせると、オレのお面に手を伸ばしてきた。慌ててオレは彼女の手を払う。

「一体何考えてるんですか!？」

「? 貴方が言いだしたことでしょ」

疑問府を浮かべる委員長。狙ってるのか？ それとも天然か？

どっちにしても恐ろしい結末が待っているそうだ。

オレのツツコミを受けた後、彼女は一瞬疑問府を浮かべていたが、オレが何を言いたいのかわかったらしく手を打った。

「大丈夫ですよ。生まれ変わりなら、多少の抵抗があります。それに今の貴方に惚れると言うのは……」

何だろう。すごくバカにされた気がする。

「何だって言うんです？ 続きを言って下さいよ」

続きを促すと、彼女は少し迷った後にこう言った。

「はつきり言いますよ。今の貴方に私を惚れさせることなどできませんわ。そんな心配をしなくても、警備委員には呪いや魔法への耐性だってちゃんとしてありますよ？」

呆れたように首を振る委員長。そこはかとなく優越感を感じる。いいだろう、やってやるうじゃねえか。もしオレに惚れたら、レット・バトラーみたいに『It's your problem not mine.（それはアンタの問題で、オレの知ったことじゃない）』とか言ってフってやるからな。あれ？ この台詞は風と共に去りぬじゃなくて、カサブランカだったかな？ まあいいや。

「行きますよ」

「ええ、おいでなさい」

じっと睨み合う。そして、オレはお面に手をかけ……取った。

「詰め所でなんてハレンチなことをやってるんですか！……って、あれ？」

その瞬間、扉を蹴破って警備委員が部屋に飛び込んできた。この間オレを追ってきた2人の片割れ……女だ。顔を隠さないと大変なことになる。だが、再びお面を付ける前に、オレは彼女と目が合ってしまった。

「オレの顔を見るな！」

オレはお面を付けるより、とにかく顔を隠すことを優先した。両の手で顔を覆う。でも、おそらく間に合わなかっただろう。せめて彼女にも呪いや術などに対する抵抗が強い事を祈るしかない。

「ベンブルベン！？ アンタどうしてココに……。それに服も乱れてないし」

あれ？ いたって普通ですよ。

オレは視界を確保するため、左腕で顔の 特に頬のあたりを隠しながらお面を付ける。

「良いタイミングでしたよ、瀬津さん。なにか変な兆候はありますか？ ベンブルベン君が妙に気になり始めた。とか」

「な、何言ってるんですか委員長。何でこんなヤツなんか……」

何だか居心地が悪そうな表情をしている。つゝか、委員長もこんな話出来るんだな。

「何か言いました？」

「なんでもございません。それより、委員長は大丈夫なですか？」

生まれ変わりの上女傑とは言え、委員長も女性。何かしらの影響があつてしかるべきはずだ。だが、彼女の様子は先ほどと変わらな  
い。

「ええ、影響はありませんでしたよ。瀬津さんが部屋に飛びこんで  
来た時、貴方は見られてはいけないと考えたでしょう？ 力を抑え  
ることができたんですよ」

彼女の後ろでくの一 瀬津が事情を知らないので頸を傾げてい  
るが、普段と変わったようには見えない。

「この希望が見えてきました。訓練を繰り返せば、きっと貴方は完  
全に能力を抑えることができますわ」

そう言つて、彼女は手を差し出した。  
そしてオレは警備委員となった。

×××××××

「……つてなことがあつたんですよ」

10月の終わり。

オレは辺りを警戒しながら、護衛対象と話をしていた。

『トリック・オア・トリート！ お菓子くれないとイタズラするよ

！』

『ほらよ、これやるからとつと失せる』

『やだ。だからイタズラする！』

『この、ケダモノ！』

『ケダモノじゃないよ、変態と言う名の淑女だよ。いただきます！』

『キヤー！』

イベントにかこつけてイチャつくカップルの声が寮内に響く。カーテンの隙間からは外に飾られたカボチャランタンを通したオレンジの明かり。そう、今日はハロウィーンだ。

オレは今、警備委員の仕事として、吉良義央よしなかの生まれ変わりである吉良ヤマトの護衛をしている。

【『吉良義央』

江戸中期の高家たけけで、通称上野助。『忠臣蔵』において主人の仇として赤穂浪士に殺されてしまう。悪役として有名だが、実際は良い領君で、キチガイの暴走に巻き込まれて幕府に消されたとか。（イン・ボウロン『フリーメーソンから鳴滝まで―世界の陰謀』1975ミюнヒハウゼン出版刊より）】

「ああ、ありがとう。しかし、彼らもまだ小さいのに……」

吉良は顔を曇らせる。決して美男子とは言えないが、穏やかな顔つきで性格も顔と同じく穏やかだった。だが、今は顔に疲れを張りつけていた。

「安心して下さい。我々警備委員がアイツらを決してあなたに近寄らせません」

オレが彼の護衛についているのには理由がある。今年中等部に途中編入してきた赤穂浪士の生まれ変わり達は、主人の仇として吉良先輩を狙い始めた。最初は一人が突っかかって行くだけだったのだが、人数が集まると先生が止めようとしても危険な集団となった。そして先輩が一度大怪我を負わされて以来、警備委員が護衛に付いている。

「おっと、アイツらが来たようです」

オレンジに混じって赤い光。大きな塊となったそれは次第に男子寮に近づいてくる。

オレは窓を開けると、懐からホラ貝を出して吹く。これで屈強な警備委員の仲間達が援護に来てくれるだろう。オレはそれまで足止めすれば良い。

「さて、オレは外で迎撃してきますんで、帰って来るまで決してドアを開けないください」

「わかった。良かったら、戻った後にさっきの話の続きを聞かせてくれないか？」

「ええ、もちろん。それでは！」

軽く敬礼し、オレは窓の縁に足をかける。そして、跳んだ。

「イー……やっほうッ！」

先輩の部屋は3階、だが下は芝生だ。前世の力を完全にコントロールしている今のオレにとって、何の障害にもならない。

着地。

そのまま駆けだす。

街路にまだ残っていた生徒達はヤツラに巻き込まれないように道

を開ける。その中には生まれ変わりも何人が見られる。ガキ相手に何をビビってやがる。

「ダイアー」

隣にはいつのまにか禰津が居る。オレが速度を落とすと、彼女は並走しながら報告して来る。

「先生方から許可が下りたわよ。『死ななきゃ多少傷めつけてもオツケー』だって。でも、ちゃんと警告するのよ」

「わかった。総員に通達『オレが突っ込んだらついて来い』ってな」  
「全く、脳筋は救えないわね。了解よ、『委員長』」

肩をすくめたかと思うと、禰津の姿は消えた。

オレは走りながら、覚醒具を展開する。黄色と赤の魔槍は、ランタンの光を受けて鋭く光っている。

「トリック・オア・トリート。お菓子くれなきゃ、打ち入るぞ！」

くれてやつても打ち入ろうとするだろうが。

呆れながらもオレはヤツらから10mほど離れた位置で停止。

「警備委員だ。お前らの数々の狼藉、これ以上学校は見逃さないぞ。大人しく集団を解散しろ」

一応警告をするが、おそらくは無駄だろう。ヤツらはオレを路傍の石か何かと考えているのか、進軍を止めやしない。

と、飛んできた矢が提灯の一つに突き刺さった。おそらくは那須。



「　　たく、オレが一番槍だつてのに」

オレが完全に能力をコントロールできるまで巴先輩は何度も特訓に付き合ってくれた。時には専科に魅了を解いてもらわねばならない事態にもなったが、オレは彼女を一時の主として戦い抜いた。

デイルムツド前世のオレが進もうとし、途中で断ち切られた道。それを疑似的に体験することが出来たのだ。

『今度は貴方が上に立ちなさい』

引退する時、先輩はそう言ってオレにホラ貝をくれた。  
やがてオレもこう言って部下に渡すのだろう。そして、今度は終生の主人と共に生き、死ぬ。

「ダイアー・ベンプルベン、参る！」

終わり。

## デイルムツド編（後）（後書き）

妹から『桃組＋戦記』を勧められた時に思いついたSS。当初はフィオナ騎士団を出しての前世否定系だったのですが、何度も筆を置いては取るといふ動作を繰り返した結果、こうなりました。ちなみに、執筆をスタートしたのはこれまで投稿した中でこれが一番早いです。

……感想が長くなりました。全編主人公一人称と言う試みをしたために読みにくいこともあったでしょう。はたまた、祐喜達の活躍を期待していた方もいたかも知れません。ですが、本編を読んでこのあとがきも読んでくださった方に言います。私の作品を読んでくださってありがとうございます。愛譚学園に所属するオリキャラ達を主人公としたこのシリーズは時々続けるつもりでいます。もしお気に召しましたら、次の私の作品もよろしく願います。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n2863o/>

---

桃組 + (プラス)戦記妄想外伝

2011年1月9日20時45分発行